

平成20年度 特別支援教育実践研究協力校報告書

仙台市立宮城野小学校

研究テーマ

通常の学級に在籍する配慮が必要な児童への支援方法の工夫

～場・人材・時間を工夫した指導形態を通して～

1 はじめに

本校では、平成17年度から、一人一人のニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行うために、特別な配慮を要する児童に対して取り出し指導を実施してきた。昨年度は、特別支援教育実践研究協力校の指定を受け、通常の学級に在籍する13名の児童に対して、8名の教師が担当して、「げんきタイム」「寺子屋指導」など支援体制や方法を工夫して取り出し指導を行った。取り出し指導によって、児童が分かる喜びや満足感を得て、通常の学級の中でも落ち着いて生活する姿や積極的に活動する姿が見られるようになるなどの成果を得ることができた。

しかし、学習内容が難しくなっていくことや年度途中の転入で、他にも通常の学級での学習面や生活面において支援を必要とする児童も出てきた。なかには、発達障害の診断を受けている児童や診断は受けていないが同様の状態を示している児童もいた。また、保護者の同意がなかなか得られずに取り出し指導を行うことができない児童、あるいは、教科全般ではなく単元によって学習理解の遅れが見られるために継続した取り出し指導を勧めるまでには至らない児童もいた。

このように、何らかの形で支援を必要とする児童が増える一方で、取り出し指導に対応できる教員数には限りがあり、これ以上の時数増は難しい状況にあるのも実情であった。

そこで、今年度は、取り出し指導対象児童以外の特別な支援を必要としている児童についても支援を可能にしていくために、再び校内体制を見直したり、支援や指導の在り方を工夫したりした。本校の特別支援教育をさらに推進し、必要としているより多くの児童に支援の手をさしのべるために、「全職員で支援の手を少しずつ」をモットーに、全教職員の理解と協力を得て取り組んでいきたいと考えた。

2 平成19年度の取り組み

①取り出しによる個別指導の実施	②寺子屋指導の実施	③校内研修の充実
<ul style="list-style-type: none">・基本的に1対1で、個のレベルに合わせて教材を用意し、継続的に指導を行う。・12名の児童に対し、6名の指導者で対応した。	<ul style="list-style-type: none">・教師対グループで、一斉指導の内容を分かりやすく指導する。学習内容によって対象児童が入れ替わる。・4学年の算数で実施した。	<ul style="list-style-type: none">・講師を招いての特別支援教育に関する校内研修会を3回実施した。・近隣校の研修会にも参加している。

〈成果と課題〉

- 取り出し指導による個別指導によって、分かる・できる体験が積み重ねられ、それが自信となって通常の学級での学習や活動に積極的に取り組んだり、落ち着いて生活したりするようになった。
- 寺子屋指導では、一人の指導者が複数の児童を指導することができ、参加児童の励まし合いが生まれるなど、効果的な学習がなされた。また、つまずきが解消されるとすぐに一斉指導に戻ることができた。
- 「インシデントプロセス法」「ソーシャルスキルトレーニング」「発達障害とその具体的な対応」について研修を深めることができ、特別支援教育について教職員の意識も高まった。
- 取り出し指導に対応できる教員数に限りがあり、増加傾向を示す対象児童に対応するだけの時数増は難しい状況であり、校内体制の見直しが必要である。
- 寺子屋指導では、学年の時間割を統一しなければならないため、行事や担当者の出張などによる時間割変更の対応が難しく、時間の確保が大変である。

- 教職員の特別支援教育への意識が高まるとともに、一人一人異なる状態を示す児童への具体的な支援や指導方法についての教職員側のスキルアップが必要である。

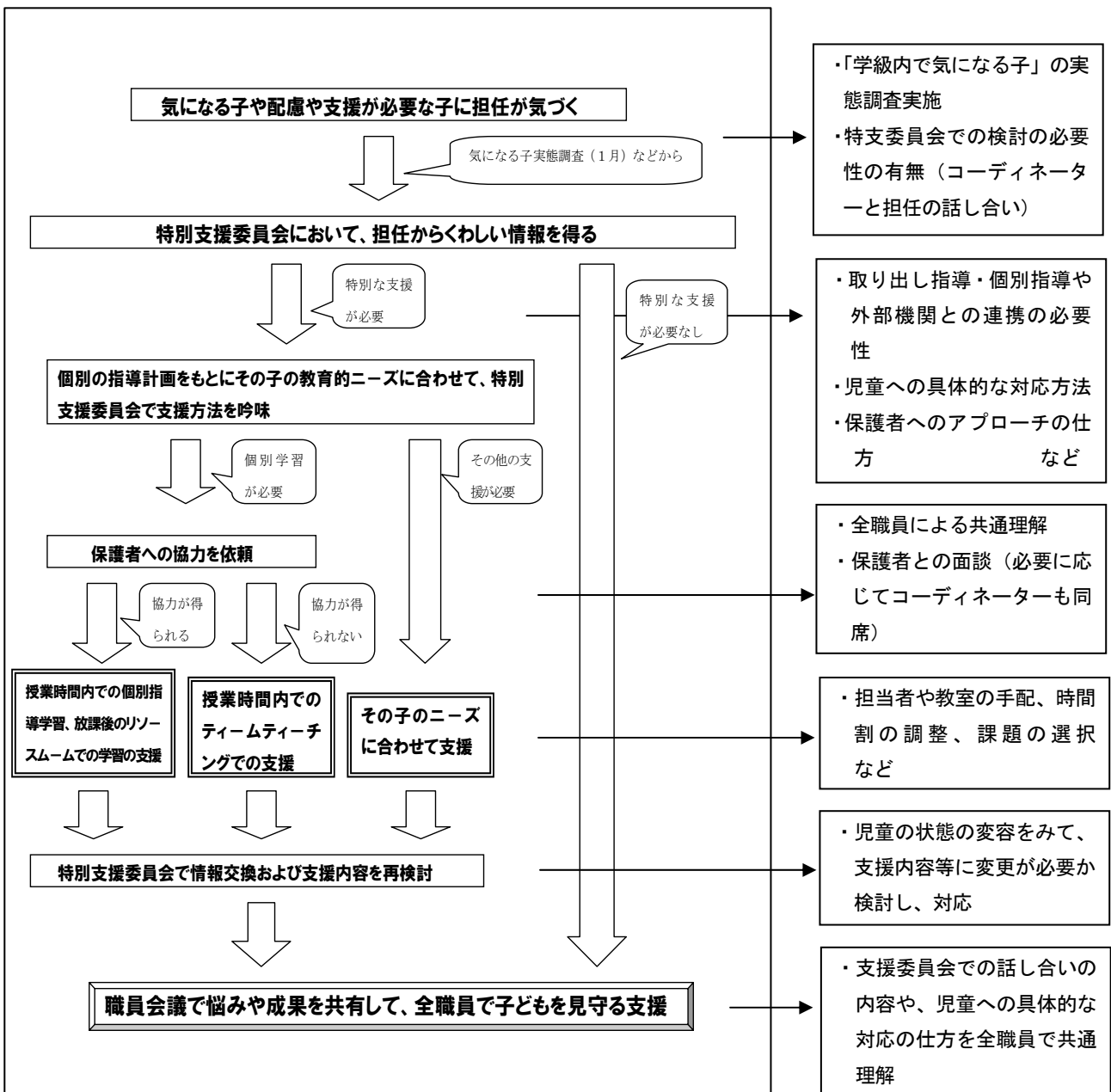
3 今年度の取り組みの方向

特別支援委員会で昨年度までの取り組みや今年度の校内事情などを含めて話し合いを重ね、成果の見られた昨年度までの取り出し指導の形を可能な部分で継続しつつ、さらに、以下の3点を中心に組み込んで行くことにした。

①教室内での少人数指導	②スキルタイム時の個別指導	③特別支援学級担任による指導
・昨年度までの取り出し指導児童も含めて、教室内での少人数指導、グループ指導を行う。	・朝のスキルタイム時に、国語・算数のつまずきの見られる児童に対して、個別指導を行う。	・特別支援学級担任が通常学級に入り、TTの形での指導を行う。 ・逆交流での通級を行う。

これらの3点の取り組みによって、別室での取り出し指導以外の方法によっても、何らかの形で特別な支援を必要としている児童への指導・支援を可能にしていきたいと考えた。

4 支援開始までの流れ



5 指導形態

本校でこれまでに行ってきた主な指導形態は以下の通りである。その年の教員の配置によって可能な形で実施してきた。

指導形態	児童数	担当者	指導場所	備考
取り出し指導	1～2	少人数指導担当、特別支援教育補助担任講師、高学年教科担任制による空き時間の	元気ルームなどの別室	平成17年度から実施
寺子屋指導	4～7	少人数指導担当	少人数指導教室	平成19年度実施
少人数指導	14～20	少人数指導担当	少人数指導教室	平成17年度から実施
教室内少人数・グループ指導	4～8 (～16)	学級担任、高学年教科担任制による空き時間の教員	教室	平成20年度実施
スキルタイム時間の個別指導	1～3	高学年教科担任教員	特別教室	平成20年度実施
特別支援学級担任が通常学級に入っの指		特別支援学級担任	教室	平成20年度実施
特別支援学級への逆交流による指導	1～2	特別支援学級担任	特別支援学級教室等	平成18年度から実施

6 今年度の取り組みの実際

(1) 取り出し指導(げんきタイム)の継続

前年度末までに、各担任に行った「学級内で気になる児童」についてのアンケートをもとに、特別支援委員会での話し合いを経て、保護者の同意が得られた児童について取り出し指導を実施した。

昨年度まで取り出し指導を行っていた高学年児童は、教室内での少人数指導へと移行したため、中学年児童5名を2名の担当で指導にあたった。年3回の打ち合わせの他、げんきタイムファイルを通して毎時間の指導について担任と担当者との連携・共通理解のもとに指導を行っている。

低学年児童については、特別支援委員会での話し合いの結果から、学級内での担任の支援と、算数の時間の少人数指導・特別支援学級への逆交流を行うことで支援をしている。

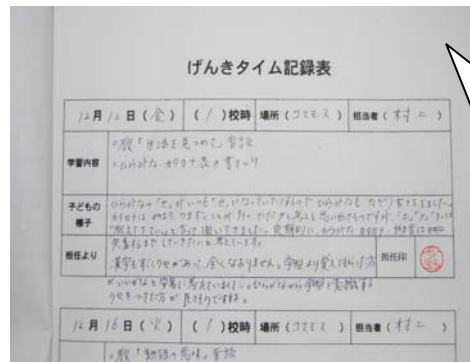
取り出し指導の時間割

月		火		水		木		金				
学級	教科	担当	学級	教科	担当	学級	教科	担当	学級	教科	担当	
1	4-1D	国語	村上	4-1D		4-1D		4-1D	4-1D	国語	村上	
	4-1H	国語	村上	4-1H		4-1H		4-1H	4-1H	国語	村上	
	4-2A			4-2A		4-2A		4-2A	4-2A			
	4-3B			4-3B		4-3B		4-3B	4-3B			
	4-3C			4-3C		4-3C		4-3C	4-3C			
担当		澤田・土屋		澤田・土屋		土屋		土屋・鈴茂				
2	4-1D			4-1D		4-1D	国語	村上	4-1D			
	4-1H			4-1H		4-1H		4-1H	4-1H			
	4-2A			4-2A		4-2A		4-2A	4-2A			
	4-3B			4-3B		4-3B		4-3B	4-3B			
	4-3C			4-3C		4-3C		4-3C	4-3C			
担当		藤原		澤田(前土屋)		桑田		木村・伊藤		鈴茂		
3	4-1D			4-1D		4-1D		4-1D	4-1D			
	4-1H			4-1H		4-1H		4-1H	4-1H			
	4-2A			4-2A		4-2A		4-2A	4-2A			
	4-3B			4-3B		4-3B		4-3B	4-3B			
	4-3C			4-3C		4-3C		4-3C	4-3C			
担当		桑田		佐藤		藤原		伊藤		鈴茂		
4	4-1D			4-1D	国語	村上	4-1D		4-1D			
	4-1H			4-1H		4-1H		4-1H	4-1H			
	4-2A			4-2A		4-2A		4-2A	4-2A			
	4-3B			4-3B		4-3B		4-3B	4-3B			
	4-3C			4-3C		4-3C		4-3C	4-3C			
担当		桑田		佐藤		藤原		土屋		澤田・木村		
5	4-1D			4-1D		4-1D		4-1D	4-1D			
	4-1H			4-1H		4-1H		4-1H	4-1H			
	4-2A	国・算	村上	4-2A	国・算	村上	4-2A	国・算	村上	4-2A	国・算	村上
	4-3B	国語	大月	4-3B	国語	大月	4-3B	国語	大月	4-3B	国語	大月
	4-3C	算数	大月	4-3C	算数	大月	4-3C	算数	大月	4-3C	算数	大月
担当		鈴茂・土屋		(後)土屋・(前)桑田・澤田		木村		(後)土屋				
6	4-1D			4-1D		4-1D		4-1D	4-1D			
	4-1H			4-1H		4-1H		4-1H	4-1H			
	4-2A			4-2A		4-2A		4-2A	4-2A			
	4-3B			4-3B		4-3B	国語	大月	4-3B			
	4-3C			4-3C		4-3C	算数	大月	4-3C			
担当		木村・土屋				澤田・木村		澤田(前)				

指導者と場所、指導内容

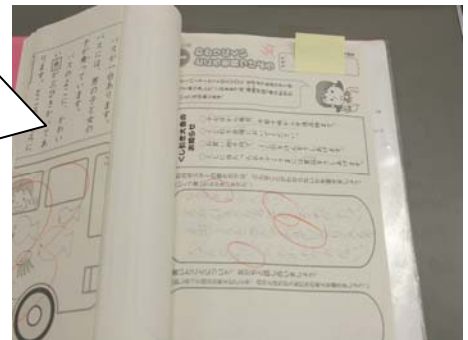
番号	学級	名前	時数	場所	担当	形態	内容
D	4-1		4時間	こすもす	村上	個別	国語を中心に基本的な内容の個別指導を行う
I	4-1		4時間	こすもす	村上	個別	国語を中心に基本的な内容の個別指導を行う
A	4-2		5時間	サンホール	村上	個別	国語・算数について、本人の実態に合わせて、個別指導を行う
B	4-3		4時間	げんきルーム3階	大月	個別	算数の基本的な内容について指導し、できたという喜びを味わえる
C	4-3		4時間	げんきルーム3階	大月	個別	算数の基本的な内容について指導し、できたという喜びを味わえる
合計		5人	21時間				

げんきタイムファイル



担任と担当者が記入し、毎時間の指導や児童の様子を伝え合い、共通理解を図る。

ファイルには学習に使用したプリント類も綴じ込んで記録を蓄積する。



*げんきタイムファイルは、1年間使用して、個別の指導計画とともに、次年度の担任へ引き継ぐ資料となる

(2) 昨年度までの取り出し指導対象児童も含めた教室での少人数指導

昨年度、主に寺子屋指導を行っていた児童が高学年に上がると、教科担任制となるために、学年で算数科の時間を統一することができなくなり、寺子屋指導の形の継続が困難になった。児童が、昨年までの指導によって学習の遅れやつまづきをかなり克服してきていたこともあり、今年度は、学級内での少人数指導の形で支援を行うことにした。算数の時間に学級担任の他に、各学級担当の教師が入り、一斉指導と少人数・グループ指導とを組み合わせることで支援を行った。

昨年まで別室での寺子屋指導を受けていた児童は、他の児童と同じ教室で同じように学習していても分かる・できることに自信をつけている。保護者も「みんなと一緒にいる」とことや「一緒に学習していても必要などころで対応してもらえる」「みんなと一緒に学習してもついて行けるようになった」ことに大きな安心感をもっている。

また、算数の時間は常に教師が2人いることで、他の児童にも目が行き届き、必要な児童に必要な場面で対応ができ、全体的な学習の理解や定着にも効果が見られている。

高学年算数時間割

月	火	水	木	金
朝の読書	国語スキル	朝の運動か読書	算数スキル	朝の運動か読書
5-1	5-1 算数 佐藤	5-1	5-1	5-1
5-2	5-2 算数 伊藤	5-2	5-2	5-2
5-3	5-3	5-3 算数 鈴木・土屋	5-3 算数 鈴木	5-3
6-1	6-1	6-1 算数 木村・澤田	6-1	6-1 算数 木村
6-2	6-2	6-2	6-2	6-2
6-3	6-3	6-3	6-3 算数 桑田・木村	6-3
澤田・土屋	澤田・土屋		土屋	土屋・鈴木
5-1 算数 佐藤・鈴木	5-1	5-1	5-1	5-1
5-2	5-2	5-2 算数 伊藤・鈴木	5-2	5-2
5-3	5-3	5-3	5-3	5-3
6-1	6-1	6-1	6-1	6-1
6-2	6-2	6-2 算数 藤原	6-2	6-2 算数 藤原・木村
6-3	6-3 算数 桑田	6-3	6-3	6-3
藤原	澤田・土屋	桑田	木村・伊藤	鈴木
5-1	5-1	5-1	5-1	5-1 算数 佐藤
5-2	5-2 算数 伊藤・鈴木	5-2	5-2	5-2
5-3	5-3	5-3	5-3	5-3
6-1	6-1	6-1	6-1	6-1
6-2	6-2	6-2	6-2 算数 藤原・木村	6-2
6-3	6-3	6-3 算数 桑田・木村	6-3	6-3
藤原	佐藤	藤原・鈴木	伊藤	鈴木
5-1	5-1	5-1 算数 佐藤・鈴木	5-1 算数 佐藤・鈴木	5-1
5-2	5-2	5-2	5-2	5-2 算数 伊藤
5-3	5-3 算数 鈴木	5-3	5-3	5-3
6-1 算数 木村・澤田	6-1	6-1	6-1 算数 木村	6-1
6-2 算数 藤原	6-2 算数 藤原・木村	6-2	6-2	6-2
6-3	6-3	6-3	6-3	6-3
桑田	佐藤	藤原	土屋	木村・澤田
5-1	5-1	5-1	5-1	5-1
5-2	5-2	5-2	5-2 算数 伊藤・鈴木	5-2
5-3	5-3 算数 鈴木・土屋	5-3	5-3	5-3 算数 鈴木・土屋
6-1	6-1 算数 木村・澤田	6-1	6-1	6-1
6-2	6-2	6-2	6-2	6-2
6-3	6-3	6-3 算数 桑田	6-3	6-3 算数 桑田・木村
鈴木・土屋	澤田・佐藤		木村	
5-1	5-1	5-1	5-1	5-1
5-2	5-2	5-2	5-2	5-2
5-3	5-3	5-3	5-3	5-3
6-1	6-1	6-1	6-1	6-1
6-2	6-2	6-2	6-2	6-2
6-3	6-3	6-3	6-3	6-3
	木村・土屋		木村・澤田	澤田・伊藤

*教室での指導で工夫していること

- ・一斉指導にどの子もついて行けるように、話の聞き方やノートのとり方などの学習訓練を年度当初に徹底して行った。
- ・各学級それぞれの児童の雰囲気や学習の理解度によって、一斉指導と少人数・グループ指導とを使い分けている。学級や単元によっては、はじめから学級内を2グループに分けて指導することもあった。
- ・一斉指導の際に、T2は児童の様子を観察しながら、必要な部分で補足説明を加えるなど臨機応変に対応をした。
- ・基本的に単元最後の習熟を図る段階では、少人数指導を必ず行っている。
- ・算数の時間内での指導では、理解ができなかったり、定着が見られなかったりした場合には、放課後の時間に個別指導を行った。

(3) スキルタイム時間の個別指導

本校では、1時間目の前の朝の活動に週2回15分間、火曜日に国語、木曜日に算数のスキルタイムを設定している。今年度は、この時間を利用して、一斉授業のなかで理解や定着に遅れが見られがちな高学年児童に対して個別指導を行った。スキルタイムでの個別指導では、他の児童と同じ課題を少人数教室などの別室で取り組ませてきた。

短時間ではあるが、教室でひとりひとりが行っているときと違い、分からない部分を教えてもらいながら継続して行うことで、参加した児童は「分かった」「できた」という経験を積み重ねて自信をつけている。また、スキル部分が定着することで、一斉授業のなかでもつまづき場面が減り、効果を上げている。

回を重ねるうちに、「自分も行きたい」と申し出て参加する児童も出てくるようになってきている。

指導場面の写真



(4) 特別支援学級担任による支援

①通常の学級に入っの指導

昨年度末に行った仙台市の学力検査の結果から、算数で取り出し指導対象児童以外に、得点の低い児童がいることが分かった。そこで、中学年の算数には少人数指導教員が入っているが、今年度はさらに、各学年で特に得点の低かった児童をピックアップして、その児童の学級の算数の時間に、特別支援学級担任が入って学習支援をするようにした。算数の時間には3人の教師が1つの教室で指導・支援を行うことになる。特別支援学級担任は、ピックアップした児童を中心に、他のつまずきが見られる児童にも支援をしている。学習支援の他にも教室内で学習になかなか集中できない児童などに、特別支援学級での経験を生かして対応をした。

このことによって、ピックアップした児童以外にも理解や意欲の向上が見られるようになってきている。

少人数指導と特支援学級担任の時間割

月	火	水	木	金
朝の読書	国語スキル	朝の運動か読書	算数スキル	朝の運動か読書
3-1	3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3	3-3
4-1	4-1	4-1	4-1	4-1
4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
4-3	4-3	4-3	4-3	4-3
3-1	3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3	3-3
4-1	4-1	4-1	4-1	4-1
4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
4-3	4-3	4-3	4-3	4-3
3-1	3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3	3-3
4-1	4-1	4-1	4-1	4-1
4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
4-3	4-3	4-3	4-3	4-3
3-1	3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3	3-3
4-1	4-1	4-1	4-1	4-1
4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
4-3	4-3	4-3	4-3	4-3
3-1	3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3	3-3
4-1	4-1	4-1	4-1	4-1
4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
4-3	4-3	4-3	4-3	4-3
3-1	3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3	3-3
4-1	4-1	4-1	4-1	4-1
4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
4-3	4-3	4-3	4-3	4-3

特別支援学級担任の算数の授業時の持ち物



特別支援学級担任は、中学年6学級のうち各学年1学級ずつに入っている。少人数指導の形態の場合は、下位群のグループで指導にあたる。

図示や色分けをした説明のためのカードや蛍光ペン、目印のための付箋紙の他、学習用具の忘れ物にも対応できるようにしている。

学級担任の声

- ・ 特別支援学級担任が入ったことで、下位群の児童へのフォローが十分できるようになり、どの児童にも分かる授業が展開できるようになった。
- ・ 必要な部分で言葉や手をかけてもらえることで、児童の集中や意欲、学習理解において高まりが見られる。挙手しなかった子が発表する姿もみられるようになっている。

児童の感想

- ・ 分からないところを教えてくれたり、忘れ物をしたときに貸してくれたら、頼りになってうれしい。
- ・ 先生がくると問題が解けるから勉強が楽しい。
- ・ 先生が優しく教えてくれて、分かりやすく教えてくれて、最近、分からないところがなくなってきた。
- ・ (特別支援学級の) 先生と一緒にやるとできる。

また、特別支援学級児童が交流学习として音楽・体育・図工・生活科などの授業に参加する場合も、特別支援学級担任と一緒に入り、特別支援教育の経験を生かして行動や作業の遅れがちな通常の学級児童への支援も行った。

②通常の学級児童の特別支援学級への逆交流

学習や友達との関わりなどで問題を抱えている児童を、特別支援学級に逆交流として受け入れた。国語や算数の学習指導の他、友達との関わりや集団でのルールについても指導を行った。逆交流を行っている児童は、特別支援学級で楽しく学んだり、友達と関わったりする経験を通して、所属学級での生活でもトラブルが目に見えてなくなり、落ち着いて生活するようになっている。

冬休み明けには、面談を通して保護者の同意を得ることができた児童1名も逆交流を開始している。

逆交流時使用のカード



(5) その他の取り組み

①教室を飛び出す・教室へ入れない児童への職員室・保健室対応

気持ちが不安定になるなどして、教室を飛び出してしまう・教室移動ができないという児童には、職員室の教職員が対応し、心の安定を図った後に教室へと戻らせた。技師の仕事に興味を示したときには一緒に仕事の手伝いをさせてもらう、保健室の物に興味を示したときには養護教諭が寄り添う、など、全職員で対応してきた。

また、登校後に教室に入れない児童には、保健室登校で様子を見ながら心の安定を図っていった。特別支援教育コーディネーターと養護教諭とで連携を図りながら、保護者の相談にも対応した。児童の様子は徐々に落ち着き、養護教諭が教室まで送っていくと授業に参加できるようになっていき、保健室への登校もなくなった。

②特別支援教育に関する校内研修・授業研究の実施

【研修1】7月

講義 「発達障害児の対応の仕方（発達障害児を持つ親の立場から）」

講師 みやぎ発達障害サポートネット 伊藤あづさ 様

《参加者の感想》

- ・実体験に基づいた話だったので、障害を持つ子の親の気持ち・心のゆれ・学校や担任への期待など、これまでの研修とは違った角度から発達障害について学ぶ機会になった。
- ・保護者の立場としての話だったので、逆に教師がどのように様子を伝えたり、支援策を考えたりすればよいのかということを考えることができた。個別面談前ということもあって大変参考になった。

【研修2】11月

講義 「通常の学級に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒への理解と対応」

講師 仙台市立蒲町小学校 赤間 宏 校長先生

《参加者の感想》

- ・「心配な行動への対応例」や「子どもの行動を3つに分けて対応する」などは今後の指導において大変参考になった。何となく、これまでの経験で「こうすればいいのかな」というレベルだったものが自信を持って「こう対応しよう」というように自分の中で納得して指導できそうだ。
- ・具体的な経験に基づいたとても分かりやすい話だった。自分のクラスの子を思い浮かべながら聞くことができ、「あの子に対して～したい」「～しよう」と言う思いをもつことができた。とても有意義な研修だった。

【授業研究】12月

教科 算数科「算数の勉強をしよう」

授業学級 情緒障害学級・知的障害学級

《参観者の感想》

- ・一人一人の個人差が大きく、実態が違って、ひとつひとつに手だてが講じられており、みんなが興味を示して取り組んでいた。

- ・ノートの中身が充実していて一人一人の実態に合わせて作られていて、やる気を起こさせる声掛けの仕方等々、大変学ぶことの多い1時間だった。

③外部機関や生徒指導部との連携

今年度、仙台市発達相談支援センターや児童相談所等に通所・相談をしている児童については、保護者の了解を得て、心理検査や相談結果と学校での配慮事項などを知らせてもらい、それらを参考にして、実際の指導・支援を実施している。

特に、今年度は児童相談所や大学の研究室を含めて児童と関係する7つの機関が集まったのケース会議にも参加した。ケース会議では、7つの機関それぞれがどのような形で児童に関わるのかを確認し合った。ケース会議後は、各機関との連携を図って対応にあたってきた。児童は、特別支援教育コーディネーターや担任との関わりによって、現在は落ち着いた学校生活を送っている。

また、生徒指導部と連携して年3回の児童理解の会を行い、特別な支援を必要としている児童等について、校内教職員の共通理解を図った。

5 成果と課題

(1) 成果

①児童の変容と別室での取り出し指導から教室内での支援への移行

昨年度まで別室での取り出し指導を行ってきた児童を、今年度は、高学年を中心に、教室内での支援へと移行させることができた。昨年度までの取り出し指導の継続によって、児童が学習の遅れを克服してきていたことも移行へと踏み切る要因のひとつになっている。

《4年間個別指導を継続している児童の例》

1年目

- ・学習について行けず、児童も担任も困っていた。
- ・保護者も悩み、特別支援学級入級も視野に入れていた。



2～4年目

- ・別室での個別指導を行う。2年生時は1対1で、3～4年生時は寺子屋指導の形態で指導を継続した。継続的な話し合いと記録の積み重ねを行った。
- ・個別指導によって、学習にも少しずつ自信をつけて、学級での学習や生活にも明るく元気に取り組むようになっていく。



5年目

- ・教室内での支援へと移行する。
- ・教室内でも十分対応できるまでになっている。

本校の特別支援教育では、教室外での様々な支援を行いながら最終的には教室内での学習や生活を可能にすることを目標としている。教室内での支援への移行は、その意味でも大きな成果であった。

②特別支援学級担任の専門性を生かした指導

特別支援学級担任が通常の学級に入って指導を行ったことで、学習不振や集団への適応などの様々な支援を必要とする児童に専門性を生かして対応することができた。T2として教室全体を見つめながら、そのときどきで支援を必要とする児童に合わせた対応を行うことで、より多くの児童に支援の手をさしのべることができ、学級全体の児童の学習意欲や理解の面での向上も見られた。

③職員の意識向上と全職員で取り組む特別支援教育

校内研修や授業研究によって、様々な角度から特別支援教育に関する研修を行うことができ、担任として、あるいは別の立場から、特別な支援を必要としている児童にどのように関わることができるのかを、教職員一人一人が考えてアプローチするようになるなど、特別支援教育に関する意識の向上が見られた。また、週2回の打ち合わせや職員会議、生徒指導部と連携した児童理解の会などを通して、特別な支援を必要としている児童の実態や具体的な対応の仕方について全職員で共通理解を図ることができた。そのことによって、担任外の教職員の理解や協力も得て児童の支援にあたることができ、「全職員で支援の手を少しずつ」という考え方が浸透してきた。また、コーディネーターを中心にした具体的な支援開始までの動きもスムーズに行えるようになってきている。

(2) 課題

①指導者の確保と支援体制の整備

今年度は、限られた教員数の中でより多くの児童に支援の手をさしのべるために、高学年教科担任制による空き時間教員、特別支援補助担任、低・中学年の算数科少人数指導教員、特別支援学級担任などが時間を捻出し、指導体制を工夫して児童の支援にあたった。高学年教科担任制を始めとして次年度には、どのような職員配置になるのかによって支援の仕方も変えていかなければならないと思われる。学生ボランティアの導入も含め、その年の学校の様々な状況に合わせた指導者の確保や支援体制の再整備を行っていく必要がある。

②研修の充実

通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童は増え続けているのが現状である。また、児童の抱えている問題は一人一人が異なっており、対応の仕方もまた異なってくる。教師の言葉のかけ方によっても児童の反応は大きく変わってくる。児童の実態と特性をしっかりと把握し適切な対応をするためにも、特別支援教育に関する研修をより充実させていく必要がある。

③個別の教育支援計画の策定

特別な支援を必要としている児童の指導では、児童の教育的ニーズや保護者の意向を踏まえながら個別の指導計画を作成して、それをもとに指導にあたった。しかし、複数の外部機関との連携を行うことや、児童の進学などの将来を見据えた長期的な支援のため、「個別の教育支援計画」の策定について検討していかなければならない。

6 おわりに

「全職員で支援の手を少しずつ」をモットーに、担任はもちろんのこと、担任外の教職員も一丸となり、様々な形で特別な支援を必要としている児童に支援を行ってきた。

今年度は、「場所」と「人材」と「時間」とを様々な組み合わせ、指導形態を工夫することで、限られた教職員の中でできる限りの支援を行った。子どもたち一人一人が、いきいきとした学校生活を送ることができるように、今後も、そのときどきの本校の実情に応じた支援体制を探り、全職員で共通理解を図りながら、特別支援教育のさらなる充実を目指していきたい。

資料

「学級内で気になる子」の実態調査

平成20年5月7日（水）
特別教育支援委員会

気になる子の実態調査

先生方に「気になる子ども」についてお聞きします。該当するものに○をつけ、記入欄には、可能な範囲でお書きください。

記入者

1. クラスまたは、校内で気になる子どもはいますか。 いる いない
2. 「いる」の方にお聞きします。何年何組ですか。 年 組

3. 「いる」の方にお聞きします。その子どもの気になる状態に該当するものに○をつけてください。
(複数回答可)

番号	気になる状態	○記入欄	番号	気になる状態	○記入欄
1	かん然		2	極端な引込み思案	
3	孤独、無交友		4	依存的、無気力	
5	乱暴、破壊的行為		6	激しい感情の爆発	
7	盗み、持ち出し		8	虚言癖	
9	夜尿、頻尿		10	極端な偏食	
11	指しゃぶり、爪かみ		12	チック	
13	登校しぶり、不登校		14	頻繁な頭痛、腹痛の訴え	
15	落ち着きのなさ、多動		16	学習の偏り、学力不振	
17	自閉的傾向		18	広汎性発達障害	

その他の問題行動
()

4. 「いる」の方にお聞きします。具体的にその子どもの様子をお書きください。
()

5. 「いる」「いない」両方の方にお聞きします。今、お困りのことがありましたら、お書きください。
()

※気になる子どもが複数いる場合は、この用紙をコピーして使用してください。



気になる子の実態調査結果

平成20年7月14日(月)

学年	学年組	気になる状態	具体的な様子
1	組	依存的、無気力 落ち着きのなさ、多動 学習の偏り、学力不振	・算数・国語など、自分が苦手とする教科では、授業に集中できず、離席が多くなる。
	組	乱暴、破壊的行為 落ち着きのなさ、多動	・周りの状況を考えず、大きな声を出す、教室をぬけ出す等の行為が見られる。 ・友達をよく叩いてしまう。身の回りの整理整頓ができない。 ・放課後の行動も不安。
	組	幼さ、情緒的不安定	・調子が悪いとき2～3歳の子のように大声で泣き叫び、止まらなかった。 ・兄、母親の様子も心配。
2	組	依存的、無気力 学力不振	・一斉指導では理解できないことが増えてきた。 ・学年が上がるにつれて個別に指導が必要になると思う。
	組	学力不振	・学習の飲み込み時間に時間がかかる。集中力がなく、問題などは一緒に取り組まなければ適当にやってしまう。板書も一人で写すのは難しい。 ・生活面でも幼さが見られ、身支度や整理整頓など配慮が必要である。 ・やっていないこともやったり言ってしまう、やったことをやっていないと言ってしまうこともある。
	組	学力不振	・生活面では問題はないが、学習面（特に国語）で遅れが見られる。自分で問題文を読み取り答えることが難しい。現在は放課後の個別指導などで何とかついてきているが、中学年になると取り出し指導が必要になるかも知れない。
3	組	孤独、無交友 自閉的傾向	・何か自分の意に反すること等があったり、気になることがあったりと全く動かなくなる。7学年に対応してもらっている。
	組	学習の偏り、学力不振	・学習の遅れが目立つ。忘れ物が多く、提出物もほとんど出さない。宿題は特に多く、なくしてしまうこともしばしば。 ・休みがらで、歯痛腹痛を理由に数日間休むこともある。(母もそれほど欠席について重く考えていない。)
	組	乱暴 落ち着きのなさ、多動 学力不振	・誰に注意されてもその内容が響かない。(理解できていない。) ・思ったことをすぐ口にする。(状況がよく分からない。)
4	組	アスペルガー障害	・周囲の子からのひとことに反応し、パニックになることもある。(自分からパニックに入っていく感じもする。)

※校内でWISC-IIIの検査をすることは可能です。ただし、保護者の同意が必要です。
※取り出し指導を行う場合も保護者の同意が必要になります。

個別の指導計画（実態把握）

平成20年度 個別の指導計画（実態把握）

氏名		生年月日	平成	年	月	日	歳	性別	第	学年	組
生育歴(医療機関の情報を含む)						諸検査の結果					
家族構成						家庭環境					
学校での様子						現在の対応					
授業	授業										
	休み時間										
検査・採録	検査・採録										
	興味・関心のあること										
保護者の願い・本人の願い						担任の願い					
支援を必要とする内容											
支援の方針	学習	日常生活・対人関係									

個別の指導計画（支援計画）

平成20年度 個別の指導計画（支援計画）

氏名()					
1年間の指導目標					
学年	学期	対人関係	目標	手だて	変容・評価
			1	学習面	
2	学期	対人関係	生活面		
			学習面		
3	学期	対人関係	生活面		
			学習面		

平成20年度

特別支援教育実践研究協力校 研究報告書

研究テーマ

通常の学級に在籍する

配慮が必要な児童への支援方法の工夫
～場・人材・時間を工夫した指導形態を通して～



仙台市立宮城野小学校